

カビテ語をめぐる最近の動向

萩原 寛

0. はじめに — 調査目的の変更とその後の経緯 —

本学国際文化経済研究所の助成金を得て、2000年2月28日から3月7日にかけて、マニラ近郊のカビテ市において前回から4年ぶりに調査を行った。前回（1996年1月29日から2月3日）は、カビテ語話者のカビテ語に対する意識調査が主たる目的であったが、同時に、死語化しつつあるカビテ語復興に携わる人々の中から中心的存在と目される三名にインタビューを行った（前回の調査結果は『調査と研究』第27巻第1号、pp.1-18., 1996年に掲載したとおりである）。

今回の調査目的は、前回の動向の延長線上として当然あったであろう公教育へのカビテ語教育導入の結果を分析することにあった。実際、後述するように、公教育への導入を要請する動きが前回の調査を行った年の、おそらく時系列的には調査よりも後の時点であったと思われるが、文部省地方教育課の上層部にまで届き、彼らの内諾を取り付けていたのである。しかしながら、今回の調査に先立つ1999年に、カビテ語保護育成運動における中心人物の一人であったNorma Castor Bersabe女史が他界し、また、自身がカビテ語話者であり地元カビテ市と文部省を結ぶ太いパイプ役であったカビテ州教育委員会教育長補佐のEnrique Escalante氏が他県に転出したこともあってか、こ

の公教育へのカビテ語教育導入案は頓挫してしまっただけである。そのことを筆者は現地に着いて初めて知ったのであった。

急遽、当時のカビテ市長、Timoteo O. Encarnacion氏に面会を求めて、市としてのプランに変更があったか確認したところ、たとえ市として公教育への導入を望んでも、公教育の中身は文部省の専管するところであり、文部省の許可がなくては致し方がないといのことであった。様々な調査計画をしていた筆者は、やむなく所期の方針を変更して、文献の収集とマニラを含めたカビテ語研究者の人脈開拓に残りの時間を振り向けたのであった。

そうした中、国立フィリピン大学のEmmanuel Luis A. Romanillos助教授の面識を得、氏がそれまで刊行したカビテ語関係の論文や評論の抜き刷りとコピーを贈られる幸運に恵まれた。また、後述するように、インスティトゥート・セルバンテス（Instituto Cervantes。スペイン語教育とスペイン語圏文化の普及を目的としてスペイン政府が1991年に設立。名誉総裁はスペイン国王。総裁はスペイン政府首相が兼任。世界38の都市に支部を置く）のマニラ支部が、筆者の帰国後の秋に「文化活動2000年10月」と銘打った事業を行い、その一環としてアテネオ・デ・マニラ大学でフィリピンのスペイン語系クレオールを中心テーマとする

講演会が開催されたが、それに先立って、講演会に呼ばれたカビテ市の研究者グループから日本の筆者に連絡があった。その時は、講演会の具体的な内容はおろか、そうした文化事業が存在することすら詳しく知らされなかったが、とにかくカビテ語全体に関する筆者の見解を至急教えてもらいたいとの要請だったので、開催日が目前に迫っていたこともあり、コンピュータのあるカビテ市立図書館に電子メールを送ったのであった。それから二月ほどして、「スペイン語およびポルトガル語語彙をベースとするクレオール学会 Associação: Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola」と「ピジンおよびクレオール学会(The Society for Pidgin and Creole Languages)」の合同国際学会が2001年6月にポルトガルのコインブラ大学で開かれるので、ぜひ参加して研究発表してもらいたい旨の招待状が、主催者代表のJohn Holm氏から直々に筆者のもとに送られてきた。無論、「カビテ語叙述部における基層語の現出(Aparición del sustrato en el predicado del caviteño)」の演題で、世界20数カ国からの参加者を前に研究成果を発表したのは言うまでもない。

1. 民間におけるカビテ語教育の推移

Romanillos氏(2000)によると、1964年にカビテ語の母語話者が集まって、市内に「カビテ・チャバカノ・サークル(Círculo Chabacano Caviteño)」を創設してカビテ語の保護育成に努めたという。一時は優秀な学生には奨学金を出すなど活発に活動していたが、設立から28年後の1992年に幕を閉じてしまった。世代間の不和が原因の一つだったと言う。ところが、この組織の解

散と前後して、サン・ロケ地区にあるマヌエル・サン・ロハス小学校の元教諭Norma Castor Bersabe女史が、40年間教鞭をとっていた当該校で課外授業としてカビテ語の自主講座を始め、さらに、1996年からは園児らのグループや成人である裁縫教室の生徒にも教育の輪を広げていったのである。こうした中、カビテ語初の教科書である*El primer libro del chabacano, Lenguaje de chabacano, Lecciones de chabacano*が女史の手で次々と生み出されていった。ただし、これらは本として出版されたものではなく、レイアウトまで仕上げた手書きまたはタイプライターによる手稿であり、実際の使用にあたってはコピーが配布された。女史の努力は当時カビテ州教育委員会教育長補佐の職にあつて、自身カビテ語話者として教科書を作る場合の音声表記に苦慮していたEnrique Escalante氏を始め、やはり自身カビテ語話者であり標準カビテ語の確立とカビテ語を通じたカビテ市民のアイデンティティーの定着に熱意を燃やしていた当時の若手副市長、Jesus I. Barrera氏などの地元研究者グループの動きと連動して、前述のように、カビテ語の公教育への取り込み案についての内諾を、文部省地方教育課の上層部から取り付けていたいたのであった。しかし、残念ながらこのプランは今のところ立ち消えとなったままである。ただし、次のセクションで触れる比較的最近になって設立された「カビテ市チャバカノ協会」の活動いかんによっては、公教育への導入案が再浮上する可能性もあり、今後の動向が注目されるところである。

2. カビテ語保護育成の動向

カビテ語をめぐる最近の動向

カビテ語を保護育成しようという運動には三つの方向からのアプローチがあり、それはまた、カビテ語をどのように評価するかに関わってくる。

ひとつは旧来からある立場で、カビテ語を無教養な人々あるいはきちんとしたスペイン語教育を受けなかった人々が使う、スペイン語の「崩れた」亜流と見る捉え方である。実際、アテネオ・デ・マニラ大学で行われた「文化活動2000年10月」の講演会でJohn M. Lipski氏が指摘したように、カビテ語とはほぼ同根であり、当面カビテ語のような死語化の危機に瀕していないミンダナオ島のサンボアング語話者にあつてさえ、「チャバカノ（フィリピンのスペイン語系クレオール）の俗称）には文法がない」という俗信をそのまま信じ込んで、「本物の」スペイン語に対してひげ目をかんでいる人が多い。かてて加えて、スペイン語は今でもフィリピン社会においては最上層階級の言語であり続けており、また、本物志向という点で言えば、1936年から1939年にかけてのスペイン内戦時代にスペインから亡命して来た人々とその末裔、および近年スペイン語圏から移住してきた人々をメンバーに、小規模ながらも言語社会が形成されていて、これはまた彼らから見たカビテ語評価が独特な色彩を帯る結果となっている。つまり、スペイン語はすでにフィリピン社会では昔日のような通用性がなく、最上層階級の家庭内かカサ・デ・エスパニャ（フィリピン・スペイン協会）やインスティトゥート・セルバンテスのようなスペイン語が通じる、あるいはスペイン語を使うがために人々が集う、閉じた環の中でしか用いられていないため、カビテ語やサンボアング語のようなスペイン語系クレオールを「崩れた亜流」と位置付けることによって、すでに英語に対して失われ

た文化上の優位性をカビテ語に対しては保たれると同時に、おそらくは近い将来、高齢のスペイン語話者が消えてしまうと、少なくとも非スペイン系（血統上純粹のスペイン系でないという意味で）のフィリピン人の家庭では、社会的価値の高い英語が支配的存在になるのではないかという不安を、彼らより言語人口の多いスペイン語系クレオールに未来を託すことで、多少なりとも和らげようとしているように見受けられるのである。このグループの特徴は、当人のカビテ語運用能力のいかに関わらず、客観的な事実をそのまま記述するにとどまっている点にある。たとえば、スペイン王立アカデミアの通信会員であるGuillermo Gómez Rivera氏は、ウェブサイト（<http://geocities.com/Tokyo/Pagoda/7029>）を通じて、カビテ語に限らずフィリピン全般のスペイン語系クレオールについて例を示しながら論じている。

二つ目は、スペイン語と比較すれば文法構造が極めて単純な点から、前述の「ひげ目」に近いものを感じながらも、カビテ語を自分達のアイデンティティーのよすがとして積極的に評価しようという地元カビテ市内の母語話者を中心とする動きである。ただし、彼らもまた、一般のフィリピン人と同様、ひとりで三つ以上の言語を自由に操る。したがって、日常のコミュニケーションは相手の言語運用能力に応じて、カビテ語、タガログ語、英語の間でめまぐるしくランゲージシフトが行われている点を看過してはならない。彼らこそカビテ語の保護育成と日々の暮らしが直接連結している人々であるが、ことに家庭内における世代間のコミュニケーションに支障や困難が生じるのを極力おさえたい、自身の言語を次代に伝えたい、地元の絆のよすがとなるものを持ちたいという切々

たる思いが、この運動の原動力となっている。このグループには、前述のすでに消滅した「カビテ・チャバカノ・サークル」や故N.S.Bersabe女史、E.Escalante氏、J.I.Barrera氏が含まれるが、インターネット上ではつとにカビテ出身の米国移民 Rogelino A.Santos氏が"Cavite City, El lugar de nisos"(http://www.dock.netrogers/kabite.html)という名のホームページを立ち上げ、市の歴史や地理、観光スポット、料理、文化、風俗習慣、宗教行事と並べてカビテ語（チャバカノ）の簡単な歴史と実例を紹介している。2000年にはカビテ市立図書館員のJocelyn dela Rosa女史が、カビテ市立図書館の公式ホームページ(http://www.cavitecitylibrary.home.ph)を立ち上げ、説明文の数箇所にも英語と併記するなどカビテ語を積極的に用いている。さらに、2001年にはカビテ語に関するサイトを二つ追加し、「カビテ市チャバカノ協会」を紹介するページで、写真の説明文に全文カビテ語を採用している。この「カビテ市チャバカノ協会(Asociacion Chabacano del Ciudad de Cavite)」とは、2000年に同図書館内に設立された組織で、現在の会長は Jose A.dela Rosa氏である。会員には前出のJocelyn dela Rosa女史はもちろんのこと、変形文法によるカビテ語の句構造分析を試みた、元フィリピン・ノーマル大学教授のLibrada Llamado女史も名前を連ねている。またオブザーバーには、公教育へのカビテ語教育導入の気運が高まった時代の、元カビテ州教育委員会教育長補佐のE.Escalante氏と元市長のT.O.Timoteo氏の二名があたっている。カビテ語に関する講演のほか、2001年8月にはサン・ロケ教会でカビテ語によるミサもとりおこなうなど、活発に活動を行っている。

三つ目は、筆者も含めたクレオール語学を専門

とするグループの存在がある。これは、上記のイスパニダー (hispanidad: スペイン文化にアイデンティティーの基盤を置く主義) を基軸とする立場とも、言語のみならず文化としてのクレオールそのものにアイデンティティーを求める立場とも距離をおいており、あくまでも純粋に学問的な関心からカビテ語を研究しているに過ぎない。しかしながら、そうしたまったく中立の立場にあるグループの存在自体が、結果的にはカビテ語の保護育成を支える格好となる場合もある。たとえば、元小学校教諭のPurificacion N. Ballesteros女史は、筆者がカビテ語研究を始めて以来ずっと、高齢にも関わらず、炎天下での現地調査に同行して骨身惜しまぬ手伝いをして下さる方なのだが、年に一度の大祭に際して毎年サン・ロケ教会が1000部出版する分厚い機関紙で、インスティトゥート・セルバンテス主催の「文化活動2000年10月」の講演会の内容を手短かに紹介した後で、筆者が請われて急遽カビテ市立図書館に送付した電子メールを、次のように要約して引用している。

-Says he, quote "I don't think it is right to call Chabacano of Cavite "bastardo", "lengua de plaza o mercado", "lengua de tienda", even if the word chabacano in Spanish means "coarse, unpolished or awkward". Because Chabacano has its own phonetic systems, morphemes and syntactic rules, semantic functions, substantial structure which is known as grammar. You have series of stories titled "Ñora Monang" and "Ñol Paco" and a rich source of Zarzuela with Chabacano music." -He says, "So it would underestimate it, as a result, to think it's a lowly language". Unquote.

これはとりもなおさず、翌年8月に行われたカビテ語によるミサに、教会からあふれ出んばかりに集まったカビテ語話者に対して向けた、熱いメッセージの役を担わされていることになるのである。

3. カビテ語研究の動向

カビテ語の研究がほぼ同源のサンボアンガ語に比べて極めて少ないのは、言語人口の圧倒的な差による(1997年に出版されたフィリピン統計局の1995年度調査結果によると、カビテ語話者23,082名に対して、サンボアンガ語話者の数は10倍以上の285,161名である)。カビテ語の研究にも前セクションで述べたようなアプローチの差が見られるのは興味深い。

ひとつはイスパニスタ(hispanista:スペイン語やスペイン文学あるいはスペインの歴史や文化、政治を研究または文筆活動の主領域としている人)の側からの研究で、カビテ語をはじめフィリピンのスペイン語系クレオールをフィリピンの歴史の中でとらえようとする姿勢が特徴的である。以下の論文がそれにあたる。

Farolán Romero, Edmundo. "Raíces lingüísticas del vernáculo filipino", *Revista Filipina*, Tomo II No.4 Primavera, <http://members.aol.com/EFaro26164/primavera99.html>, 1999.

この論文ではカビテ語、タガログ語、イロカノ語の語彙がスペイン語から形態的にどのように離れていったかについての研究の中間報告を行っている。

Fernández-Pasión, Antonio. "Un poco de

realidad: desaparecerá el español en Filipinas", *Revista Filipina*, Tomo II No.4 Primavera, <http://members.aol.com/EFaro26164/primavera99.html>, 1999.

この論文(というよりもエッセー)では、1920年代にカビテで発行されていたカビテ語の雑誌"Confetti"を例にあげ、アルゼンチンやウルグアイなどのスペイン語で広く使われている二人称親称形vosが、カビテ語には見られるのにサンボアンガ語には存在しない点を指摘している。また、第二次世界大戦後、英語に押されて「現地語とスペイン語の融合」が消えていくことを惜んでいる。

Gómez Rivera, Guillermo. "El idioma criollo de Filipinas", <http://www.geocities.com/Tokyo/Pagoda/7029/rivera5.html>, 2001.

この論文は主にサンボアンガ語について書かれているが、一部ながらカビテ語への言及もあり、サンボアンガ語も往時のフィリピン諸島において、リングア・フランカとして周辺部に広まっていった点が述べられている。

もうひとつの方向性は、カビテ語の韻文を中心とした文学研究である。この分野では前出のフィリピン大学のE.L.A.Romanillos氏が精力的に研究を発表している。それらは一旦*Seven Stories of Chabacano*という叢書にまとめられたが、最近そのうちのいくつかをRogelio A. Santos氏のホームページ、"Cavite City, El lugar de nisos"に掲載している。

Romanillos, Emmanuel Luis A. "El chabacano de Filipinas", in *the Seven Stories of Chabacano*, University of the Philippines, Manila, 1999.

この論文ではフィリピン独立運動の英雄ホ

セ・リサールが自作の小説"El Filibusterismo" (原文スペイン語) の中で描いた、カビテ語に極めて近いが、今は消えてしまったマニラ市内のエルミタ語による会話や、カビテの生んだカビテ語詩人Eliodo Ballesteros(1892-1973)の作品を取り上げてその実態を示すと共に、チャバカノ全体の歴史を概観しつつ、現代の統計を引用しながらカビテ語やサンボアング語のようなチャバカノが、これからも消えることなく続くであろうことを予測して見せている。

-----. "Eliodo Ballesteros",
<http://www.dock.net/rogers/eliodoro.html>,
 2001.

この論文では詩人Ballesterosの代表的な二つの作品"Piesta"と"El chabacano caviteño"を取り上げて、詩人が活躍していた時代のカビテ語保護育成運動について概観している。

-----. "Chabacano Proverbs, Riddles and Metaphors", <http://www.dock.net/rogers/riddles.html>, 2001.この論文ではカビテの人々の間に伝えられてきた俚諺となぞなぞ、それに暗喩が収録されている。その豊かな文学性はカビテ語が俗に言われるような粗野な言葉などではないことの証左であり、今まさに消えかかりつつある状況に警鐘を鳴らしている。

三番目の潮流として、言語学や社会言語学からのアプローチがある。殊にこの分野では、世界中のスペイン語系クレオールを研究しているJohn M.Lipski氏が様々な場で研究成果を発表してきているが、最近の動きとしては、2000年10月19日と20日にアテネオ・デ・マニラ大学で行われた

"Shedding light on the chabacano language: learning from general linguistics and similar cases"と題された、フィリピン以外の地域でのスペイン語クレオールを含めた、一連の講演会での発表がある。氏の関心は専らサンボアング語にあるが、カビテ市でも二度ならず現地調査を行っており、今回の講演でもカビテ語への言及がなされた。両日の講演会では氏のほかに、John Holm氏を始め7名の研究者が壇上に立ったが、いち早くウェブサイトで全文を公開したLipski氏以外の何人がカビテ語に言及したか、今のところ不明である。この講演会での氏の演題と内容のあらまは以下のとおりである。

Lipski, John M. "Chabacano/Spanish and the Philippine linguistic identity", <http://www.personal.psu.edu/faculty/j/m/jml34/chabacano.pdf>, 2001.

この論文では、現代のフィリピン社会ではスペイン語話者が高齢者となって40代以下ではまれであること、現在でもスペイン語は上流階級の言語でありつづけており、中流階級であっても貴族の末裔の誇りとして、家庭内でスペイン語が使用されていることなどを指摘した後、カビテ語に関しては、今はノスタルジーの源泉となるほど死語化に向かっていること、オーソドックスなスペイン語に対して引け目を感じながらも、スペイン文化の継承を言語という形式で受け継いでいることへの矜持が感じられること、しかしその一方で、フィリピン全体に行き渡っている、第三の国語を学校で教えるのは時代錯誤だと言う考え方にも、カビテ語話者は共感を感じている点

カビテ語をめぐる最近の動向

を指摘している。

最後に、筆者が参加した2001年6月26日から29日にかけてポルトガルのコインブラ大学で開かれた、「スペイン語およびポルトガル語語彙をベースとするクレオール学会Associação: Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola」と「ピジンおよびクレオール学会(The Society for Pidgin and Creole Languages)」の合同国際学会について報告する。両学会では世界各地で行われているクレオールについての研究発表を、A.C.B.L.P.E.では筆者を含めて30名が、S.P.C.L.では45名が行った。その中で、チャバカノすなわちフィリピン人のスペイン語系クレオール（ただし、最近ではフィリピン周辺部で行われているものも指す例が見られる）に関するものは筆者のを含めて4本であったが、ほとんどがサンボアンガ語に関してであって、カビテ語については筆者のものだけであった。筆者以外ではヘルシンキ大学のAngela Bartens女史が、“Current Trends in Chabacano and in the Chabacano-Speaking Community”の演題で行った発表の中に、カビテ語話者にも発話中の英語へのランゲージ・シフトが観察される事実を指摘しただけであった。筆者は前述のように、“Aparición del sustrato en el predicado del caviteño (カビテ語叙述部における基層語の現出)”の演題で、語彙や文構造上きわめてスペイン語に近いカビテ語は、動詞部のアスペクトとテンス、そしてスペイン語文法と比較した上でのモードに関しては、タガログ語をベースにしていることを、現地でインタビューを通して収集した資料や、カビテ語で書かれた文献などのデータを公開しつつ発表した。

4. おわりに

インターネットは、情報の信憑性や知的所有権、著作権などさまざまな問題を内包しながらも、急速にそのバーチャルな世界を広げて行っている。ことに出版事情が厳しい状況下の国々や地域では、印刷にかかる費用や流通費用などの面で、なかなか活字化されなかったデータが、容易に開示され入手可能となった。ことに、クレ奥ールのように、市場原理を持ち込めば出版など到底不可能な言語の活字化や関連情報、研究成果がウェブ上に存在するという事実は、その保護育成を願っている人々にとっては、強力な味方が出現したようなものである。少数言語の多くが今世紀中に死滅すると予測されているが、インターネットは少なくともそのスピードを下げさせるかも知れない。地元カビテでは「カビテ市チャバカノ協会」が産声をあげたばかりである。何よりも心強いのは、こうした運動の中心にいるのが年齢的にも社会の中堅層であるという点である。今後の彼らの活動を静かに見守って行きたい。